
予言と運命の詩 —炎の章—

沖田 光海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予言と運命の詩 ― 炎の章 ―

【Nコード】

N6335U

【作者名】

沖田 光海

【あらすじ】

予言と運命の詩 ― 光の章 ― より、10年前……アークが大戦に勝利し、英雄と褒め称えられる少し前から、物語が始まる。

一人の青年、アークは兵士である祖父に呼び出され、帝都へ足を運ぶ。

そこで一人の不思議な少女――玲に会い、彼の運命がかわる。

若き日のラメドメンバーたちに、どつかれながら、アークは果たして、英雄になることができるのだろうか？

毎日毎日未来の大將軍フィアルと喧嘩しながらも、本当に世界を救えるのか！？

登場人物&物語紹介

年号 第52歴 35年

登場人物

アークⅡレーシュ

名前 アーク

姓 レーシュ

年齢 17

性別 男

Data

炎の民の末裔である青年。 困った人は放っておけない性格。
なかなかの熱血漢で少しバカっぽい性格ではあるが、頭が悪いわけではなく、人より数倍敏い。

元々は小さな村で自警団をしていたが、その腕を見込まれてラメドの長老である祖父ラウⅡレーシュの勧めで帝都へ来た。

霧亜 玲

名前 レイ

姓 キリア

年齢 15

性別 女

Data

純血のコフ。それ故に周りから差別を受けて暮らしてきた。右目が藍、左目が赤紫色の瞳を持つ。小柄で美しい顔立ちの少女。強い力を持ちながらも、人を傷つけることを嫌う。

なりゆきでアークとともに行動することとなった。

フィアール＝リクロード

名前 フィアール

姓 リクロード

年齢 24

性別 男

Data

氷の魔女の末裔。冷気を自在に操る。アークと仲が悪く、よく衝突する。冷静な性格の反面マイペースな一面も持ち、空気を読めない（読まない）ことも……

戦後の焼け野原で拾った記憶喪失の少年セフィルを実の息子のよう
に育てている。

セフィル

名前 セフィル

姓 ???

年齢 12歳

性別 男

Data

右目が赤紫、左目が紫紺のオッドアイを持つ記憶喪失の少年。
フィアールのことを心の底から慕っている。

フォンル＝リクロード

名前 フォンル

姓 リクロード

年齢 15歳

性別 男

Data

フィアールの弟。後方支援を主に闘う。おっとりした性格で軍人に
似合わない。

サラ「フロン

名前 サラ

姓 フロン

年齢 17歳

性別 女

Data

治療術と攻撃術を扱う女性。異種族に対して偏見が全くと言って
いいほどない。

レントに気がある様子

レント「サフィラン

名前 レント

姓 サフィラン

年齢 19

性別 男

Data

鋭い刃を使った一撃必殺の技を得意とする。
基本的に無表情で、感情が出ない。

プロローグ

いつか、大きなことを成し遂げたいと思っていたが、正直そんなことはできるわけがない。

成功する奴なんてほんの一部ってことはわかっている。
でも男ならだれでも憧れるんだ。

世界を救って、英雄と呼ばれて、そして歴史に名を残す。

そんな御伽噺^{おとぎばなし}みたいな、夢

だからかな。

じいちゃんに、兵士として帝都へ来ないかと誘われた時、正直うれしかった

今は、異種族とニンゲンの間で戦争真っ最中。

なんでも、コフとか言う変な種族が反旗を翻して俺たちに牙をむいたらしい。

帝都の軍の兵士が足りないとかで、おれも駆り出されることになったわけだ。

ここで名をあげれば俺も、歴史に名を残すような大物になれるだろうか？

そんな淡い期待を抱きながら。

第壱幕―少女との出会い―

アークは生まれてはじめてきた帝都に驚きを隠せなかった。

「へえ、ここが帝都か……」

きよろきよろとあたりを見回していると一人の少女がアークにぶつかった

「ご、ごめんなさい！」

フードを目深にかぶった少女はあわててアークに謝ると、サッと走って行った。

「なんだったんだ一体？」

少女の走っていった方向を見ると、後ろから複数の人間が走ってくる音がした。

「あいつ、一体どこに行きやがった！」

「所詮子供の足、そう遠くへは行かないだろ」

「だが、すばしっこいガキだからな、どこへ行ったかわからねえ。」

「一応ここいらをもう一度探すぞ！」

野太い男たちがアークのそばを通り抜け、走っていった。

「何なんだ？ 一体??」

どうやら、あの少女を追っているらしかった。

あの男たちの様子からすると、少女が何かをして彼らを怒らせたらしいが……。

「物騒な世の中だし、すりか何かかな？」

だが、さっき少女とぶつかった自分は何も取られていない。

「なんだろうな、ねえ、君は解る？」

アークは数歩歩いた先の路地裏の気配へと話しかけた

「……！」

「あいつらは、うまくまいたみたいだけど、俺、君が回り道してここに帰って、そこに隠れるのを見ちゃったんだよね。」

「……………」

「怖いことはしないからさ。何か話してくれない？」

『……』

しばらく2人の間に沈黙が流れた。

「本当に、何もしないよね？」

おずおずといった様子で少女は姿を現した。

相変わらず、黒いマントのフードはかぶったまま。顔が見えない。背はアークより頭一つ分低く、マントの端から見える手足は驚くほど白かった

「君、一体なんでそんな風に顔を隠しているの？」

「それは……」

「……？」

「……か、顔に醜いやけどを負って、それで……」

さっと、少女は視線をそらした。

どうやら嘘をついているらしいが、アークは気にせず、次の質問を言った

「何で追いかけていたの？」

「……」

「何か悪いことでも、した？」

「していないわ！」

少女はきっぱりといった。

「ただ、私は買い物をしに帝都^{ニム}に来ただけで」

「そう。」

さてどうするべきか……。

このまま少女を解放したところで何か解決するわけではない。

それ以前にアークはこの少女に興味を持っていた

(でも、どうしようかなあ)

天を仰ぎ考えたそのとき。

「アーク！」

自分の名を呼ばれ、そちらを振り向くとそこには

「じいちゃん！……どうしてここに？」

「どうしても何も、お前がいつまでたっても待ち合わせの場所に現れんから探しに来たんじゃい！」

「あゝ、ごめん」

「ほれ、いくぞ！」

アークの祖父はアークの耳を引っ張り無理やり連れて行こうとした
「いででで！　ちよつとまって！」

「なんじゃ！」

祖父の言葉にアークは無言で少女を指差した。

「あの子は？」

「俺のツレ」

「どういうことじゃ？」

祖父の言葉に、アークは笑顔で答えた。

「旅人みたいでさ。道中危険だろうからって一緒に来たんだ」

「ほう。それでどうするつもりだ？」

「腕には自信があるみたいだし、城のほうで置いてくれないかな？」
その言葉に祖父ははあと大きなため息をついた

「お前といい、あいつといい……帝都の軍は託児所じゃない」

「……は？」

「まあ、いい。とりあえずついてこい」

「？……うん」

アークは少女の手を引くと祖父の後について行った。

第貳幕 — 玲 —

案内された部屋に二人きりにされたアークと少女

少女は怪訝そうにアークを見つめた

「あんなあんなこといいの？」

「は？」

「私の腕とか……」

「君が普通の兵士以上に戦闘に特化しているのはもう気づいているけど？」

「……っ！？ どうして？」

「身のこなしとか、纏っている雰囲気とかでだいたいわかるもんだけど？」

「……あんだ、ただ者じゃないわね」

「うん。よく言われる」

始終表裏のないニコニコとした笑顔の青年を少女は少し警戒しながらみていた

「……そんなに警戒しないでよ。俺人畜無害な心優しい青年だよ」

「……本当に人畜無害な人は自分からそういわないわ」

「手厳しいなあ。それより早く名前教えてくれたら、うれしいんだけど」

「え？」

「だから名前。いつまでも君とかお前とかじゃいやだろ」

「……玲」

「レイ？」

「霧亞玲」

「キリア・レイ？ ……東国みたいにファミリーネーム《苗字》が先なのか？」

「ええ。私、あっちのほうの出身だから。」

「そうか。俺はアーク・レーシユ。 気軽にアークって呼んで」

「……アークはどうして私をここまで連れて来たの？」

玲は率直に自分の疑問をぶつけた

「なんとなく放っておけなかったから」

「ナニそれ？」

あきれたように玲は言った

「放っておけなかったって……私そんなに非力じゃないわよ」

「じゃ、なんとなく運命的なものを感じたから、かな？」

「……そんなナンパはもう古いわよ」

「なんだよ、それ」

むっとした表情でアークは言った。

「本当になんか玲にそう言ったものをかんじたんだぞ」

「そう。」

頷いてみるも玲は全く信じていなかった。

本当のことなのになあ、とアークが呟いて見るも無視だ。

「……ところでフード暑くない？」

「別に、平気」

「名前まで言ったら素顔も見せてくれたっていいじゃないか！」

「勝手な男ね」

「せつかく助けてやったのに」

「頼んでなんかいないわ」

「でも、そのままじゃ怪しまれるって！ とれ」

ぐいとアークはマントを引っ張って例からそれを奪った。

フードの下の顔にアークは息をのんだ。

それほど、美しい少女だったのだ

漆黒の黒髪は窓からこぼれる日の光を反射してわずかに青く輝く。

真っ白い肌は肌荒れできもの一つなく、白く滑らかだ。

桜色の唇に、整った鼻筋。

どれもが完璧な配置を施しており、まるで神が作った人形のように。
何より目を引いたのは左右違う色の瞳。

右目が藍、左目が赤紫のオッドアイ。

大きな瞳はよほど自分の姿を見られたことが嫌なのかわずかにうるんでいる。

「……綺麗」

ぽつりとアークは玲に呟いた。

その声を聴き、目を見開いた

「な、何言っているのよアンタ！……大体の人間は人と違う私の姿を気持ち悪いっていうのに。異民族の私を嫌だっていうのに」

「なんだそれ？俺はきれいだと思うよ。まるで村の境界にあった天使の絵みたいだ」

「なにそれ？」

少女は小さく笑った

「……お、やつと笑った。なんだ意外とかわいい顔もできるんだ」
その言葉に玲は顔を赤面させた。

「な、なにそれ？ からかってんの？」

「からかってないって。それにもつたいないよ。せっかく美人でかわいいのに顔を隠すなんて」

「アンタバカ？ オッドアイの人間なんて大抵が異民族。今帝国が闘っているのは異民族たちが反旗を翻した反乱軍よ！」

「ああ、知っているよ」

アークはあっさりと答えた

「でも君は違うだろ？」

「あなたをだましているのかもしれないのに？」

「君が嘘をついているようには見えないよ」

驚くほどきつぱりとアークは言った。

そんな彼に玲は小さくバカじゃないのと呟いた。

第参幕 ―フィアール―

アークは祖父に言われて少し広い部屋へと案内された。

玲はどうしようか？

祖父は自由にいいといったので、アークは玲に声をかけたが、彼女は

「いけない」

そうきっぱりと言った。

どうやら、彼女は部屋を出たくないらしい。

あんな様子で玲は大丈夫なのだろうかと考えたが、本人からしてみれば大きなお世話だろう。

それとも一つ。

廊下であつた彼のことアークには悩みの種だ。

「ラウ殿、その人は？」

祖父の後について言っていると一人の男に声をかけられた。

銀髪に赤い瞳を持った長身の青年だ

「おお、フィアか。こいつは先日話しておったわしの孫じゃ」

祖父――ラウは簡単にアークの紹介をフィアと呼んだ男にした
「ああ、君が……。私はフィアール」リクロードだ。精々死な
ないようにがんばってくれ」

それだけ言うと、フィアールはさっさとどこかへ行ってしまった
「やっぱり、まずかったかのう……」

小さくラウは呟いたが、アークに聞こえてはいなかった。

初対面で最悪な印象を持った男――フィアールをじつと睨んで
いたからだ。

ここにるのがラメドのメンバーじゃ

ラウはアークに数枚の顔写真を見せた。

「こ奴はフォンル＝リクロード。さっき廊下ですれ違った男——
フィアの弟じゃ」

「ふんふん」

「いかつい男がジーマン＝ベッカード、この女はサラ＝フロン、そして釣り目の男はレント＝サフィラン、軽そうな奴はクルト＝ファヴァレットじゃ」

「い、一日で覚えるのか？」

アークは彼らの大まかな特徴を書いた紙を見ながらラウに聞いた。
「そうじゃ。ラメドはわしも含めてたった7人。そうむずかしいことではあるまい」

「げえー」

嫌そうにアークは呟いた。

だが、まあ仕方がない。

味方の顔を覚えて戦闘で不利になることはないだろう。

「まあ、覚えるしかないか」

紙と写真を部屋に持って行ってアークはそれをずっと眺めていた。

「なにそれ？」

「ラメドのメンバー」

「面白いの？」

「これくらい覚えていなくちゃここじゃやっていけないんだよ」

「ふーん」

玲は興味なさそうに呟いた。

その間、彼女は自分の荷物の中から一冊の本を取り出した。

題名は……

『U t o p i a』

それを見てアークは玲に聞いた

「なにそれ？」

「本」

「面白いの？」

「全然」

言ってから玲は本を投げてよこした。

その本は古代語で書かれていた。

「えーと何々？ “壱百の宝玉……楽園”??」

「へえ、アンタ古代語が読めるんだ」

「少しならね。でもよくわからない。……ところで壱百の宝玉

って何？」

「これよ」

玲は胸元から一つのペンダントを取り出した。

「ふつうは武器につけられている宝石。人の魔力を高めてくれるものよ」

「……なんでそれと楽園が関係あるんだ？」

「楽園とは創造の力。神の力のこと。数年前までこれを奪い合っている奴らがいたみたいだけど、反逆軍があちこち荒らしまわったせいで、宝玉の情報もかなり消失しちゃったみたい。私だって、本物はこれ以外見たことないもの」

そう言っ玲は苦笑した。

第肆幕 ― 人と相性 ―

「何をしているアーク！作戦通り動け！」

「作戦通りにうごいてちゃ、相手に動きを読まれる！隙のない攻撃は次を読まれやすいんだよ」

「だからと言って勝手に動くな！」

「仕方ないだろ！予定と敵の数が違ったんだから！」

「はっ、くだらない言い訳だ」

「なんだと！おい、ファイア、表へ出る」

「ああ、受けて立とう！」

ファイアとアークの言い合いにサラは小さくため息をついた。

「もう外に出ているわよ。」

彼女がそう言い終えたときにはもうすでに二人とも剣を抜いて、本気で撃ち合いをしていた

これが最近の風景となりつつある。

ラメドの駐屯所にアークが来てから、彼の剣の腕によって戦闘は楽になった。

だが、精神的なところで正直つかれる……

最初に会ったときから、二人の仲は良くなかった――いや、むしろ、悪かった。

当たり前と言えば、当たり前だ。

炎の民の血を引くアーク。氷の魔女の末裔ファイアル。

相対するその血により、二人の相性は最悪だった。

それ以前にがむしゃらな熱血漢であるアークと、冷静なファイアルとは、相性があまり良くない^{悪い}ということは手に取るようにわかることで……

「……ところで、何でラウさんは大丈夫なんですか？」

サラの言葉にラウは簡潔に答えた

「炎の民の血を引いておるのはわしの妻。あいつの祖母じゃからな」

「ああ、なるほど」

……といった疑問が解けたところで二人の仲が良くなるわけではない。

とりあえず、フォンルはアークとそこまで仲が悪いわけではなかったが……彼はあまり先祖の血を濃く引いてはいないのだ――

問題なのは、先祖返りというもので、氷の魔女の血を色濃く受け継いだフィアル。

サラがちらりと二人のほうを見ると炎と氷の力が互いにぶつかり合っではきて、水になり……を繰り返していた。

もう地面は雨上がりのようにぐしょぐしょだ。

「どうにかありませんかね」

フィアルがはじいた火球をよけながらサラは言った。

「お互いがあじゃから無理じゃろうて」

今は耐えろと言いながら、ラウはアークのよけた氷の刃を避ける。

「下手をすれば基地が壊滅します！」

泣き舌交じりにフィアの氷の刃をとかしたり、アークの炎をけしたりしているフォンはある意味一番の被害者だろう。

その姿を見ていられないというように頭を抱えるレントも然り。

「なにか、いい方法はないのだろうか？」

レントの言葉にサラはちいさく「あ」とつぶやいた。

「そうだわ。あの手があつた！」

いいことを思いついたというように、サラはフィアに言った。

「そんな事をしている暇があつたら、セフィル君の相手してあげたら？」

その言葉にフィアはピクリと反応すると、小さくため息をついた。
「ああ、そういえば最近、かまってやれなかつたな」

「あの子人見知りするから……あなたがいないと大体の人間にはまともに話もしてくれないのよ」

サラの言葉にフィアは頷くと、さっさとどこかへ立ち去って行った。

「……なんだ？」

首を傾げるアークに説明をしてくれたのはフォンだ。

「アークはまだ知らないんだね」

「？」

「兄さんは数カ月前にある子を拾って、今まで面倒をみているんだ」

「……ある子」

「本名はわからない。記憶喪失みたいだからね」

「き、記憶喪失？」

アークは眼を見開いた

そんなアークに苦笑しながらフォンは頷く

「なんでも、戦争のショックで記憶をなくしたみたいなんだ。どこで生まれ育ったのかも、自分が何者なのかも覚えていない。そんな彼を兄さんは放っておけなかったみたいで、ああやって今まで面倒をみているんだ」

「……軍の人間が？」

「忙しいときは、別の人が面倒みているし、なかなかしつかりした子で、負傷者の手当てや食料の確保なんかを良く手伝っている」

人見知りをするのが玉にきずだけど

そう言っただけでフォンは笑った。

「……根っからの仕事人間と思っていただけ、案外人らしいんだな」
アークの言葉にフォンは苦笑した

第伍幕 ― 約束 ―

「……アーク」

か細い声に振り返るとそこには玲がいた。

「玲、どうしたんだ？」

「……あなたは、帝国軍で……反乱軍から自分たちを守るために戦っているのよね？」

玲の言葉にアークは頷いた

「ああ、そうだよ。それがどうかしたのか？」

「……」

玲は少し黙った。

どうやら、言葉を選んでいるらしい。

「反乱軍を倒すには……頭をたたくしかない。その方法を知っていると言ったら、あなたはどうする？」

玲はまっすぐアークを見た。

アークは玲の言っている意味がよくわからずに、首をかしげる。

「……どういうこと？」

「だから、反乱軍を倒す方法を知っているの。」

「誰が？」

「あたしが」

きつぱりと玲は言った。

だが、その話の内容は理解しがたい内容で……

「初めてあった時から不思議な子だと思っていたけど、あんたはなにもんなんだ？」

「あたしは……」

そこまでいって玲はつまった。

「あたしは、……」

「あたしは？」

アークが聞き返すが、玲は一向にしゃべろうとしない。

いづべきか言わないべきか迷っているのだ。

「いいたくないなら、無理に言わなくてもいいよ」

そう言ってアークは玲の頭をクシャリとなでてから笑った。

「でも……」

「お前にはすべてを言う義務なんてないんだ。いつか、心の中が落ち着いたら話してほしい」

「……うん」

こくりと玲は頷いた。

「じゃあ、この話はおしまいな！」

「アーク、まって」

立ち去ろうとしたアークを玲はあわてて止めた。

「あした、またここにきてくれる？」

「なんで？」

「連れて行きたい所があるの」

玲の言葉にアークは頷いた。

「ああ、いいよ。」

「絶対よ」

「わかった、わかった」

「わかってない！」

軽い口調で言うアークに玲はすねた子供のようなむっとした表情で言った。

大人びた雰囲気を持っているから、今まで気にしてはいなかったが、玲はまだ子供だ。だからだろうか？ アークは玲の年相応に子供子供とした仕草を見てどこか安心していた。

「アーク、何笑っているの？」

「いや、別に……」

言つても、アークはくすくすと笑っている。

「また笑った！ やっぱり、あたしの話聞いてない！馬鹿にしてる」

「してないしてない」

「してるもん」

してるもんって。

意外とかわいい言い方をするなあとアークは玲を見た。

「……絶対してる」

「してないよ。どうしたら信じてくれるかな？」

困ったように笑いながら、アークは考え、ある一つの方法を思いついた。

「玲、手えだして。」

「へ？」

おずおずと出された玲の手を取ると、アークは自分の小指と例の小指を絡めた

「指切り拳万嘘ついたら針千本飲ます！」

そう言って歌うアークの顔を玲は不思議そうに見ていた

「何これ？」

「は？」

「だから、何なの？コレ」

「玲、知らないの？」

アークの言葉に玲はこくりとうなずいた。

——子供扱いするなって怒られるかと思ったけど、これはちょっと予想外……

尚もアークに先ほどの行為の意味を問う玲に説明した。

「これは……簡単にいえば約束の儀式みたいなものかな？」

「儀式？」

「そう。約束事を絶対守るって、誓いの儀式」

「へえ」

子供のよく歌う童歌とは知らずに玲は一人、その誓いをアークがしたこと驚いていた。

「そんなことしていいの？ 単なる口約束のつもりだったのに」

「いいのいいの。おれは明日絶対ここに来る。だから玲も約束忘れるなよ。」

その言葉に玲は柔らかい笑みを浮かべてうなずいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6335u/>

予言と運命の詩 —炎の章—

2011年12月15日14時49分発行